

蒼穹

梶井基次郎

青空文庫

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土堤の上で日を浴びていた。空にはながらく動かないでいる巨きおおな雲があつた。その雲はその地球に面した側に藤紫色をした陰翳いんえいを持っていた。そしてその彪ほうだい大な容積やその藤紫色をした陰翳はなにかしら茫漠ぼうばくとした悲哀をその雲に感じさせた。

私の坐っているところはこの村でも一番広いとされている平地の縁へりに当っていた。山と溪たにとがその大方の眺めであるこの村では、どこを眺めるにも勾配のついた地勢でないものはなかった。風景は絶えず重力の法則に脅かされていた。そのうえ光と影の移り変わりは溪間にいる人に始終あわただ慌しい感情を与えていた。そうした村

のなかでは、溪間からは高く一日日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはなかった。私にとってはその終日に倦あいた眺めが悲しいまでノスタルジックだった。Lotus-eater の住んでいるといういつも午後ばかりの国——それが私には想像された。

雲はその平地の向うの果である雑木山の上に横よこたわっていた。

雑木山では絶えず杜ほととぎす 鵲ふもとが鳴いていた。その麓に水車が光つて

いるばかりで、眼に見えて動くものはなく、うらうらと晩春の日が照り渡っている野山には静かな懶ものうさばかりが感じられた。そして雲はなにかそうした安逸の非運を悲しんでいるかのように思われるのだった。

私は眼を溪たにの方の眺めへ移した。私の眼の下ではこの半島の中

心の山^{さん}彙^いからわけ出て来た二つの溪が落合つていた。二つの溪の間へ楔^{くさび}子のように立っている山と、前方を屏風^{びようぶ}のように塞^{ふさ}いでいる山との間には、一つの溪をその上流へかけて十二単衣^{ひとえ}のような山褶^{やまひだ}が交互に重なっていた。そしてその涯^{はて}には一本の巨大な枯木をその巔^{いただき}に持つてゐる、そしてそのためにとさら感情を高めて見える一つの山が聳^{そび}えていた。日は毎日二つの溪を渡つてその山へ落ちてゆくのだったが、午後早い日は今やと一つの溪を渡つたばかりで、溪と溪との間に立っている山のこちら側が死のような影に安らつてゐるのがことさら眼立っていた。三月の半ば頃私はよく山を蔽^{おお}つた杉林から山火事のような煙が起こるのを見た。それは日のよくあたる風の吹く、ほどよい湿度と温度が幸い

する日、杉林が一斉に飛ばす花粉の煙であつた。しかし今すでに受精を終わつた杉林の上には褐色がかつた落ちつきができていた。^{ガス}瓦斯体のような若芽に煙つていた^{けやきなら}櫟や櫨の緑にももう初夏らしい落ちつきがあつた。^た闌けた若葉がおのおの影を持ち瓦斯体のような夢はもうなかつた。ただ溪間にむくむくと茂っている^{しい}椎の樹が何回目かの発芽で黄な粉をまぶしたようになっていた。

そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、^{しらすしらす}不知不識そのなかへ吸い込まれて行つた。湧き出て来る雲は見る見る日に輝いた巨大な姿を空のなかへ拡げるのであつた。

それは一方からの尽きない生成とともにゆっくり旋回していた。また一方では捲きあがって行つた縁が絶えず青空のなかへ消え込むのだつた。こうした雲の変化ほど見る人の心に言い知れぬ深い感情を喚び起こすものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺れ込んでしまい、ただそればかりを繰り返しているうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだん胸へ昂^{たか}まつて来る。その感情は喉^{のど}を詰らせるようになって来、身体からは平衡の感じがだんだん失われて来、もしそんな状態が長く続けば、そのある極点から、自分の身体は奈落のようなもののなかへ落ちてゆくのではないかと思われる。それも花火に仕掛けられた紙人形のように、身体のある部分から力を失

つて。――

私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう言つた感情のなかへ巻き込まれていった。そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところが、影になつた杉山のすぐ上からではなく、そこからかなりの距離^{へだた}を持つたところにあつたことであつた。そこへ来てはじめて薄^{うす}り見えはじめる。それから見る見る巨^{おお}きな姿をあらわす。――

私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというような不思議な気持ちに捕えられた。そのとき私の心をふとかすめたものがあつた。それはこの村でのある闇夜の経験であつた。その夜私は提^{ちようちん}灯も持たないで闇の街道を歩いていた。それ

は途中にただ一軒の人家しかない、そしてその家の燈^ひがちようど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている、大きな闇のなかであつた。街道へその家の燈^ひが光を投^なげている。そのなかへ突然姿をあらわした人影があつた。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いていた村人だったのであろう。私は別にその人影を怪しいと思つたのではなかつた。しかし私はなんということなく凝^じつと、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負つた光をだんだん失いながら消えていった。網膜だけの感じになり、闇のなかの想像になり——ついにはその想像もふつつり断ち切れてしまった。そのとき私は『何処^{どこ}』というもののない闇に微かな戦慄^{せんりつ}を感じた。その闇の

なかへ同じような絶望的な順序で消えてゆく私自身を想像し、言
い知れぬ恐怖と情熱を覚えたのである。――

その記憶が私の心をかすめたとき、突然私は悟った。雲が湧き
立つては消えてゆく空のなかにあつたものは、見えない山のような
ものでもなく、不思議な岬みさきのようなものでもなく、なんという
虚無！ 白日の闇が満ち充ちているのだということを。私の眼は
一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い
藍あいいろ色に煙りあがつたこの季節の空は、そのとき、見れば見るほ
どただ闇としか私には感覚できなかつたのである。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「文芸都市」

1928（昭和3）年3月号

※表題は底本では、「蒼穹《そうきゅう》」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：野口英司

1998年10月20日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蒼穹

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>